

令和 2 年 8 月 18 日現在

機関番号：14301

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2017～2019

課題番号：17KK0025

研究課題名（和文）現代アフリカにおけるジェンダーを基盤にした創造的実践知とマテリアリティの比較研究

研究課題名（英文）Comparative studies on gender-based local knowledge in modern Africa

研究代表者

金子 守恵（KANEKO, Morie）

京都大学・アフリカ地域研究資料センター・准教授

研究者番号：10402752

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 8,800,000円

渡航期間： 6ヶ月

研究成果の概要（和文）：本共同研究は、市場経済化や社会変容に直面するエチオピア西南部に暮らす人びとが、新たな生業活動を創り出す営みを、ジェンダーの違いによって生成する実践的な知に注目しながら、描き出した。事例を比較検討し、これらをアフリカ的な発展につながる社会の潜在力の一端として最定位した。日本人やエチオピア人若手研究者、エチオピアの地方大学研究者とも研究集会を実施し、今後の調査研究につながる学術ネットワークを形成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

長期的な継続調査を基盤にしてエチオピアにおける生業活動の新たな試みをジェンダーを基盤にした知に留意して分析検討した成果は、人々の経験や実践に基づいた在来の知に立脚して、地域で生じる事象を学際的に深く理解するという点において学術的な意義がある。近年劇的な変化がすすむアフリカにおいて、ジェンダーを基盤にして生じる知の違いが人々の生業活動に積極的に作用する事例を提示した点に社会的な意義がある。

研究成果の概要（英文）：This joint research described newly emerging livelihoods among communities in the southwestern Ethiopia, which had been influenced by market economy and social transformation with special reference to their gender-based local knowledge that was based on their daily practices and experiences. The members of this joint research group tried to compare the case studies according to the gender-based knowledge. We also tried to identify this newly emerging livelihoods related to their social relationships and recent economic situations as one of the potentials to open up a new possibility for another socio-economic development in Africa. We held international research meetings with Japanese researchers, Ethiopian young researchers, and scholars of local university in Ethiopia to create an academic network, which lead to research collaborations for the near future.

研究分野：アフリカ地域研究

キーワード：アフリカ ジェンダー 在来知 技法 生業 ものづくり エチオピア

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本共同研究開始当初の背景として以下の三点をあげることができる。

1) 共同研究に着手するまでの研究とそこから出発した問い

代表者は2000年代はじめにエチオピア西南部の農耕民アリが暮らす地域で調査を開始したときと比較し、土器の生産や使用をめぐる諸変化(例えば、土器が観光客向け土産物としての特質を兼ね備えて流通しはじめたこと等)に着目して、人びとが自らの身体を介して土器と相互に作用しあう過程で生じる人とモノの多層的な関係の様態(=マテリアリティ)が変成する機序をあきらかにすることをめざして調査研究を進めてきた(文部省科学研究費(基盤研究C)「現代アフリカにおける土器をめぐる創造的実践知の生成とマテリアリティの変成」(平成26-29年度))。これまでの研究では、変化のなかにあっても、女性職人はこれまでと同様の素材をもちい、道具をほとんど使わず自らの手指を使って職人が個別に確立した特定の手順にそって日用品としての土器を製作して生業を営んでいること、職人が、個々の職人の技法的な変異を積極的に評価して土器の注文を繰り返す使用者との関係性を契機にして、技術的な革新を続けていること(=創造的実践)があきらかになった。この研究の視点にたつてさらに分析をかさねることによってマテリアリティの変成の機序についての解明がすすむと考えたと同時に、この創造的実践が、現代アフリカに暮らす人びとにとって自らの生業活動を主体的に選び取っていく実践、さらには概念となりうるかという点について問いが生じていた。

2) 研究機関を介した学術ネットワーク

研究代表者が現在(2020年)所属する京都大学アフリカ地域研究資料センター(CAAS)は、1988年にアジスアベバ大学社会人類学部と部局間協定を結び、学術的な交流を開始した。2007年には、重田眞義教授(現CAASセンター長)を代表者としてアフリカの在来知というキーワードのもとエチオピアにおいてアジスアベバ大学の研究者たちとともに学際的な共同研究を開始し、2009年にはアジスアベバ大学エチオピア研究所と大学院アジア・アフリカ地域研究研究科(ASAFAS)そしてCAASが部局間協定をむすび、この学際的な共同研究(アフリカ在来知)を中核として京都大学とアジスアベバ大学の研究者ネットワークがさらに発展した。代表者も、そのネットワークのなかで2008年国際ワークショップのセッションを、この申請の共同研究者でもあるGetaneh M.博士と共同企画するなど学術的な交流をおこなってきた。

3) 個々の研究者同士の研究連携

2008年2月Getaneh Mehari氏(共同研究者1)とともに国際ワークショップ(アジスアベバ大学社会人類学部と京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科共催)のセッション(Craftwork and Livelihood)を共同組織しそれぞれのフィールドにおけるジェンダーを基盤にした知識や生業実践の相違点を具体的に認識し比較研究の着想を得た。2012年には、国際フォーラム(京都大学アフリカ地域研究資料センター主催)を介して、Samuel Tafera氏(共同研究者2)の調査地で女性が新技術を獲得して新生業を開始した事例について意見交換をおこない比較研究の切り口を検討しはじめた。2013年には、Mamo Hebo氏(共同研究者3)が調査地の女性が新たに始めた生業活動の研究報告をおこない、新たな生業活動の確立とジェンダーとの関係について意見交換した。2017年4月から7月にかけて、Getaneh Mehari氏が京都大学客員研究者として滞在中(受入研究者:申請者)、Getaneh氏の研究成果について意見交換することに加え、アジスアベバ大学社会人類学部の研究動向について情報共有をおこない、共同調査と合同セミナーを介して研究成果を比較検討し、ジェンダーを基盤にした創造的な実践知の概念を精緻化するアイデアを着想した。

以上のように、この共同研究は、代表者が取り組んできた研究を基盤にして、所属する研究機関の学術連携のサポートを受けながら個人の研究者同士の研究連携を積み重ねることを介して、開始することが可能になった。

2. 研究の目的

本共同研究は、エチオピアにおいて、ジェンダーを基盤にした知識や技法の差異が手がかりになって、新たに生成されるモノ、さらには生業活動が生み出される過程に注目した。対象とするモノを土器などの人工物に限らず、農産物などアフリカの人びとの生業活動に関わるモノへと広げると同時に、その製作者のジェンダーにも留意してマテリアリティを検討し、人びとが急激な市場経済化など劇的な変化の中で、これまで培ってきた知を基盤にしながら、いかに変化する状況に対応しているのかを描き出すことを目指した。そのためには、代表者の調査地と類似した歴史的な経緯をもった地域で、ジェンダーを基盤にした知を基軸にして自らの生業活動を再編するような人びとの営みに着目して調査をおこなう研究者とともに、比較を念頭においた共同研究に取り組むことが必要不可欠であった。以上をふまえたうえで、この共同研究では、代表者と3人の共同研究者のそれぞれの調査地域を相互訪問したうえで共同調査をおこない比較検討した成果を国際ワークショップで討議し、ジェンダーを基盤にした創造的実践による知の生成とその機序をアフリカ的な発展につながる社会の潜在力として再定位したうえで、最終的にはその成果をふまえてそれぞれが筆頭となる国際共著論文として発信することを目指した。

3. 研究の方法

主に以下の三点にそって共同研究に取り組んだ。

1) 共同調査

研究代表者がエチオピアに訪問している期間中、共同研究者たちとともにエチオピア西南部において互いの調査地を相互訪問し共同調査をおこなった。

代表者と共同研究者がこれまで調査した地域を相互訪問した（農耕民アリ、農耕民ドルゼ、農牧民ハマル、農牧民アルシ）。どの地域もエチオピア南部地域に位置しており、19世紀後半にエチオピア北部地域出身のアムハラ人に支配されてきた歴史がある。互いの調査地を相互訪問する際には、次の4点を比較検討項目とした。(1) ジェンダーを基盤にした創造的实践知、(2) ジェンダーを基盤にした知と多元的な法実践（資源の配分方法）(3) 新たな生業の確立とジェンダーを基盤にした知の実践（世帯内の意思決定過程）(4) 新技術の受容とジェンダーを基盤にした知の獲得（コミュニティ内における技術の学習過程）

2) 研究集会

代表者と共同研究者3人が、共同調査・相互訪問の前後に研究調査打ち合わせを実施した。また、共同調査の過程で、代表者の調査地域内に新設された地方大学の研究者と共同研究についての意見交換などを行った。この共同研究の最終年度（2019年度）に、共同研究者や地方大学の研究者たちと連携して、この共同研究課題にあわせた国際ワークショップを実施した。

3) 学術ネットワーク形成

アジスアベバ大学社会科学部社会人類学科、エチオピア研究所、アフリカ・オリエント研究所、ジェンダー研究所の研究者とともに合同セミナー開催し、この共同研究に関わる課題について調査研究をおこなっている研究者や大学院生と学術的な交流をおこなった。

4. 研究成果

本共同研究の成果を以下の三点にそってまとめることができる。

1) 新たな生業活動を生みだしたり、従来の慣習を超える在来の知の可能性（共同現地調査）

共同現地調査は、研究期間中に2回にわたって実施した（1回目：2018年10月～11月、2回目：2019年10月）。

それぞれの調査地域を相互訪問し、ジェンダーを基盤とした在来の知の違いに留意して、人々の生業活動に関わることを検討する過程で、より問題群を理解しやすくするために、以下の2点（a. 生業活動に関わる在来の知の実践、b. 新たな活動に関わる交渉の知の実践）に大別して議論を進めた。この共同調査と議論を介して、ジェンダーを基盤とした在来の知の違いが、関わりをもった人々の社会的な関係性に依りて、新たな生業活動を生成・進展させたり、従来の慣習をのり超える可能性があることを指摘した。

a. 生業活動に関わる在来の知の実践

農耕民アリにおいて、2000年代前半から活動を開始した乳牛を飼育して乳製品を出荷する女性の共同活動に注目した。この地域では、1970～80年代プロテスタントが浸透し始めた頃に、女性が乳牛の飼育にたずさわることが可能になった。この時から乳牛飼育に携わるようになった女性たちが、NGOや地方行政の指導を受けて、近代的な乳牛飼育の技術を導入しながら共同活動に従事している。彼女たちはより安価に良いものを地域の人たちに提供することを目指して活動を続けている。調査時点では、この女性グループを模範にして、多くの女性グループが新たな共同活動に取り組む状況が見出された。

b. 新たな活動に関わる交渉の知の実践

農牧民ハマル、アルシなどに見出されたことであったが、生業活動を行うためにはその基盤となるような資源、例えば利用できる土地、が重要な場合がある。エチオピアの近代法では、女性には土地を保有し利用する権利が与えられているが、それぞれの民族や地域では、実際には慣習的な法が大きな影響力をもっている。共同調査では、女性がそれらの権利を近代法の元に獲得するために、関係するアクターとさまざまな交渉を続けている状況について知見を得た。この試みはコミュニティの中では例外的であるが、これまで公の場で自らの権利を主張することができなかった経緯を踏まえると、当該コミュニティにとつては社会的に大きな影響をもつ出来事としてとらえることができた。

2) 日本国内の若手研究者との学術交流、エチオピア若手研究者や地方大学研究者との学術交流、地元のコミュニティへの成果還元

・日本国内においてこの研究課題に関連して、研究会を2回開催した。1つ目は、京都人類学研究会（関西圏の大学に在籍する研究者・院生が組織）と共催して2019年5月17日に開催した。研究会参加者とともに、東南アジアとアフリカの事例を踏まえながら本課題に関わる具体的な知や技法の特徴について共有した。2つ目は、アフリカ地域研究資料センターと共催して2019

年7月18日に第244回アフリカ地域研究会を開催した。参加者とともに、社会的性差を基盤にした知識と生業活動において発揮される創造性について議論した。

・本共同研究のエチオピア人研究者とともに、エチオピアにおいて、2つの国際研究集会を企画・開催した。1つ目の集会は、エチオピア国内の地方都市に新設されたジンカ大学において2019年11月9日に実施した。ジンカ大学は、本共同研究において主な調査対象とした地域に設立された。集会では、本共同研究の成果を発表するとともに、ジンカ大学の学長の協力のもと、ジンカ大学や周辺の大学からも発表者を募ることができ、エチオピアにおいてジェンダーを基盤にした技術をもとに新たな生業活動が生成される過程について議論した。次にアジスアベバ大学にて、2019年11月15日に主に大学院生を対象にして研究セミナーを実施した。アジス大学院生の発表に対して、ジェンダーを基盤にした知識の差異とそれにより生じる社会・政治的な状況について議論した。代表者が所属する京都大学の院生も参加した。

・2019年8月30日にジンカ大学大ホールにおいて、地元のコミュニティ向けに研究成果を還元する一環として、京都大学大学院生とともに写真展を開催した。写真はすべてジンカ大学の周辺地域暮らす遊牧民ムルシの人々が撮影したものであった。撮影者の背景(民族、生活空間、年齢、性別など)に応じて、視点が異なることを提示し、多様な出自の違いを積極的に理解する視点を提供することを目指した。

3) 研究成果発信

a. 2018年4月に開催された国内学術大会(日本ナイル・エチオピア学会第27回学術大会)において、ものの生成から廃棄までのプロセスに人が関与する行動やその基盤となる知について着目し、社会的な性差を基盤にした知がそのプロセスに影響を与えている点について報告した。2018年10月に開催された国際エチオピア学会では、ジェンダーを基盤にした知に関わる研究動向について、参加者と議論することができた。学会参加後、共同研究者や彼らの指導学生、カウンターパート部局の若手研究者とセミナーを開催し、エチオピアにおける生業活動とジェンダーを基盤にした知との関わりについて情報共有した。さらには、2018年12月にフランスにおいて開催された国際シンポジウムにおいて、エチオピアにおける開発実践と生業活動における新たな知(創造的な知)の生成について問題提起し、アフリカの諸地域における新たな生業活動の生成について参加者と議論を重ねた。

b. 本共同研究の共同研究者および本研究課題に関わる若手研究者の論文を編集して、英文による成果集を刊行した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 M. KANEKO & M. SHIGETA	4. 巻 59
2. 論文標題 Introduction to This Special Topic "Reconsidering Local Knowledge and Beyond"	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 African Study Monographs	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/250115	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Tefera, Samuel & M. KANEKO	4. 巻 59
2. 論文標題 Sustaining Life amid Growing Uncertainties: Hamer Womens' Engagement in Land Management	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 African Study Monographs	6. 最初と最後の頁 69-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/250119	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Morie Kaneko	4. 巻 -
2. 論文標題 5. Learning Pottery Making: Transmission of Body Techniques	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 An Anthropology of Things	6. 最初と最後の頁 115-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 金子守恵	4. 巻 -
2. 論文標題 6.土器づくりの手	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 手の事典	6. 最初と最後の頁 422-427
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金子守恵	4. 巻 -
2. 論文標題 26. インターフェイスとしての手	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 手の事典	6. 最初と最後の頁 525-528
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 6件 / うち国際学会 8件)

1. 発表者名 Morie KANEKO
2. 発表標題 Closing remarks
3. 学会等名 AAU-KU Student Seminar
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Morie KANEKO
2. 発表標題 Introduction
3. 学会等名 Research Conference on Gender-based Knowledge and Livelihoods/The 2nd Japan-Ethiopia Joint Lecture (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Morie KANEKO
2. 発表標題 Gender-based Knowledge and Newly Emerging Livelihoods in Southwestern Ethiopia
3. 学会等名 Research Conference on Gender-based Knowledge and Livelihoods/The 2nd Japan-Ethiopia Joint Lecture (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Samuel Tefera & Morie KANEKO
2. 発表標題 Sustaining Life amid Growing Uncertainties: Hamer Womens' Engagement in Land Management
3. 学会等名 Research Conference on Gender-based Knowledge and Livelihoods/The 2nd Japan-Ethiopia Joint Lecture (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Morie KANEKO
2. 発表標題 Premises of Knowledge Production: Local Knowledge Transmission among Women Potters in Southwestern Ethiopia
3. 学会等名 International Conference "Africa Multiple: Conversations and Building Networks" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Morie KANEKO
2. 発表標題 Sustainable cities; Community-based Technology & Sustainable Cities in Ethiopia
3. 学会等名 University of Bordeaux-Kyoto University Strategic Meeting for Academic Cooperation (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金子守恵
2. 発表標題 廃棄物をめぐるマテリアリティ：エチオピア西南部における使い終えたノートのあつかわれ方に注目して
3. 学会等名 日本ナイル・エチオピア学会第27回学術大会、於東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Morie Kaneko
2. 発表標題 Development of Local Knowledge of Trash in Southwestern Ethiopia with Special Reference to Used School Notebooks
3. 学会等名 20th International Conference of Ethiopian Studies, Mekelle University, Ethiopia (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Morie Kaneko
2. 発表標題 Panel 2 Developmental Challenges: Formation of Local Knowledge and Emerging New Livelihoods in Ethiopia
3. 学会等名 Kyoto-EHESS International Symposium 2019, INALCO, France.
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Morie Kaneko
2. 発表標題 Comments
3. 学会等名 International symposium: Voices for The Future: African Area Studies in a Globalizing World, Panel 3: The relationship between women's life course and school education (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Morie Kaneko
2. 発表標題 Pottery making as local knowledge in southwestern Ethiopia with special reference to finger movement patterns
3. 学会等名 The 7th HK (Humanities Korea) International Conference (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 金子守恵
2. 発表標題 「わざ」の人類学的研究にむけて：多元的な技術観の可能性
3. 学会等名 第2回「わざ」の人類学的研究：技術、身体、環境
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 金子守恵	4. 発行年 2019年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 284
3. 書名 もの人類学2 人間と非人間のダイナミクス	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	ウォルディサス ゲタネ メハリ (Woldeyesus Getaneh Mehari)	アジスアベバ大学・社会人類学部・助教	
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	ワベ マモ ヘボ (Wabe Mamo Hebo)	アジスアベバ大学・社会人類学部・助教	
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	アレム サミュエル テフェラ (Alemu Samuel Tefera)	アジスアベバ大学・アフリカ・中東研究センター・助教	